

【自著紹介】 吉田春生 『村上春樹の現在地 「街とその不確かな壁」まで』

(彩流社 2023年11月)



本書は筆者としては3冊目となる村上春樹論である。22年ぶりの出版となったのは筆者の個人的な事情による。筆者は2000年4月に公募で観光論担当の専任教員に採用され、そこから16年間、定年まで大学教員として勤務した。観光研究がメインとなり、村上に関心を向けることは控えていた。と言うよりも、教授に昇格後は生涯学習センター長を5年間、附属図書館長を2年間併任し、重ねて学長からの要請で地域総合研究所の専任所員を6年間勤め、時間的な余裕が全くなかった。

2016年3月に定年退職となり、そこから村上作品を読むことができるようになった。『ねじまき鳥クロニクル』までの作品を再読し、2002年刊行の『海辺のカフカ』以降の作品にも目を通したが、特に『海辺のカフカ』に強い違和感が残ることに気がついた。そこにある強い暴力性、残虐さ、あるいは不可解さはすでに『ねじまき鳥クロニクル』においてお馴染みのものだった。しかし筆者としてその受け止め方には大きな違いがあった。これを自分なりに解明したいとの思いが3冊目の村上春樹論に向かわせた。

この際、筆者にとって大きな励ましとなったのは、序章で取り上げた川本三郎の書評だった。村上の初期作品から最大の理解者といってよい川本は、『ねじまき鳥クロニクル』あたりから注文、あるいは疑問を突きつける書評となり、『アンダーグラウンド』では強い違和感を示すに至った。そして『海辺のカフカ』である。自分には読むのが辛かったまで書いている。主要な登場人物の行動が全て「なぜか」に終始することに疑問を呈し、最後には多くの剽窃の事例があることを指摘して書評を終えている。

加藤典洋のように『海辺のカフカ』を高く評価する評者もいるものの、筆者は川本の書評に同感するところが多かった。自分の違和感をしっかり表現することが必要だとの思いを強くしたのである。

「文学としての村上春樹」と題した第一部では、第三章の『「ノルウェイの森」の系譜』まで

村上文学世界がどのように形成されてきたかを考察した。村上春樹の方法として「剽窃とスポンテニウス」に触れたのが第一章である。スポンテニウスは村上自身の三つの発言を引用し、自発的や自然発生的といった訳語では捉えがたい側面を温泉湧出の三形態から説明した。剽窃に関しては、これを否定的な観点から見るのではなく、作品にどう生かされているかという観点から幾つか指摘している。ヒント、剽窃、引用の三段階でいえば、ヒントによるものも多い。よく知られている「中国行きのスロウ・ボート」の他にも、『村上ソングズ』で紹介される「この家は空っぽだ」「自殺すれば痛みは消える」「羊くん（ミスター・シープ）」といった曲名は村上ファンならばすぐその小説に思い至るはずであろう。「羊くん」の歌詞には『ダンス・ダンス・ダンス』を思わせる「踊るんだ」というものもある。また、村上自身が海外誌のインタビューに答えているように、『アンダーグラウンド』はその形式においてソーントン・ワイルダーの『サン・ルイ・レイの橋』を剽窃したものだった。刊行当時、特にノンフィクション作家から、村上がこの作品に取り組む動機がわからないとの声も多かったが、それを本書では解明している。

第二章の「幻視から幻想世界へ」ではそれまで幻聴、幻視だったものが、『ダンス・ダンス・ダンス』では初めて小説中の現実世界から壁を抜けてそれとは別の幻想世界へと進入する点を確認した。これによって村上は小説のストーリー展開を多彩にすることができるようになる。第三章では村上がもう二度とこのような小説を書きたくないと言明している『ノルウェイの森』がどのような意義を持つ作品かを次のような手順で明らかにした。同作品における強い促しというべきモチーフは、本人自身が語るカジュアリティ（欠損）の感覚だった。その源流は寓意性の強い中編小説「街と、その不確かな壁」にあった。さらに村上には小説を書き続ける限り漏れ出してしまうもう一つのモチーフ、高校時代にひどく女性を傷つけてしまうというものもあった。それは『ノルウェイの森』にも見られたが、作品の根幹ともなっていたのが『国境の南、太陽の西』である。それは幾つかの短編小説や『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』に至るまで見出せる。

第二部となる第四章ではエンターテインメントの一形態として、幻想世界が舞台であること、及び強い暴力性の場面が露出する点を特徴とするダークファンタジーという観点から『ねじまき鳥クロニクル』を読み直した。それによって第五章では『海辺のカフカ』で多くの人が躓くであろう、残忍な猫殺しをするジョニー・ウォーカーを東京でナカタ老人が大型ナイフで刺し殺した際の血が高松にいるカフカ少年の手や T シャツについていた場面がなぜ生まれるのかなどを村上の発言も検証しつつ位置付けてみた。終章では「村上春樹とはどのような作家なのか」を他の様々なタイプの作品と比較することで明らかにしようとした。近年、村上自身が語る自分にはモチーフもテーマもないという観点からは、それが強く表れている千葉雅也の『オーバーヒート』や又吉直樹の『火花』と対比した。ここでは山田詠美のいう「内面のノンフィクション」が意識

されている。そしてそうではないタイプ、エンターテインメントながら明確にテーマを感じさせる朝井リョウの『正欲』や辻村深月の『琥珀の夏』にも言及した。また、芥川賞作家の作品ながらエンターテインメント作品として完璧と思われる吉田修一の『太陽は動かない』を、特にエンターテインメント色が濃いと受け止められた『1Q84』と比較し、どのような違いがあるか明確にした。

最後に、補論では『街とその不確かな壁』によってどのようなことが明らかにされたかを、それまで論じたこととの関連で考えた。その第一部は、まさに『ノルウェイの森』系譜の源流たる中編小説「街と、その不確かな壁」の書き直しであり、優れた完成作である点に注目すべきであろう。それに比べ半年を経て書き継がれたという第二部、三部は、村上が初期作品からどのように変化していったか、そしてなぜダークファンタジーにまで至ったかを確認する上での好材料となっている。

【吉田春生（作家論）】